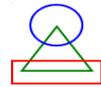


研究所通信



2015 年はる号
藤田佳代舞踊研究所

神戸東灘区住吉本町 1-4-4
TEL・FAX 078-822-2066
E-メール fkmnds@muf.biglobe.ne.jp
URL <http://www2s.biglobe.ne.jp/~fkmnds/>
JWORD で検索するなら…モダンダンス.jp

観に来て下さい！

創作実験劇場 3月8日(日) 芦屋市民ホールルナホール

菊本千永「カクレミノを編む」 稲益夢子「The scenery that I see」 向井華奈子「流跡」 金沢景子「緬女とともに」 かじのり子「静かなる近づき」

寺井美津子「倚りかからず」 平岡愛理 梁河茜「NOW OR NEVER」 藤田佳代「続ける」

出演 東仲 一矩

寺井美津子 菊本千永 かじのり子 向井華奈子 石井麻子 板垣祐三子 梁河茜 平岡愛理 稲益夢子 穂井田凜 木村はな ハーバート真唯

菊原麻理奈 原田光琉 渡辺菜子 雲井瑞帆 新田小夏 門家由采 坂本のより 中野茉歩 山鹿和奏 石澤佑唯 岡村春花 福本莉菜

演奏 MOTOKI 山元亮一 吉田香奈子

12月23日より振付が始まりました。11月に公演を終えて準備時間も短い中で、熱心によりハーサルに励んでいます。ぜひご来会下さい。今回はフラメンコの東仲一矩先生もゲスト出演されていますよ！お見逃しなく。

それでは、作舞者からのコメントです。

カクレミノを編む

去年の夏 9匹のアゲハチョウの幼虫を育て(趣味ではない。みかんの木についたものでしかたなく)、そのうち7匹が蝶として巣立っていくのを見届けました。残りの2匹は蛹になる際に、あわてふためいて出て行ってしまったので、見届けていません。蛹になる直前、幼虫は体内の水分を一気に外に出します。そんなことを知らなかった私は、「下痢した！」とあわてました。さっき食べた葉が腐っていたのか、水をかけたのが悪かったのか、とおろおろ。調べてほっと安心したのも一時のこと、今度は蛹になる場所を探し求めて、幼虫が右往左往するのにははらはら。場所を求めて動き回る幼虫たちは真剣そのもの。もの悲しいほどに必死です。時にテーブルの裏で蛹になっていた、コンセントの線の上で蛹になっていた、危ないので最後の方は、段ボールに閉じ込めました。幼虫にも性格の差があるんです。最後に蝶になった一匹は小さいときから気の強い幼虫でした。誰かが少し当たっただけでちびのくせに肉角をだして怒っていました。蛹になるのは遅く、いつまでも葉を食べていて、蛹になる直前はすぐ太ってしまいました。羽化は、日数こそ他の蛹と同じでしたが、時間は1時間近く早く、まだ羽化していないのに目がぎらぎらしているのが透けて見えました。蟬の羽化とは違い蝶の羽化は驚くほどあっさりしています。頭の部分に亀裂が入ると、1、2の3くらい出てきます。その後はゆっくり羽をかわかしてのばすのですが、できてすぐの蝶は蠅と蜂を足したような感じで、はじめてみたときは、悪いものに乗っ取られたのではないかと疑ったほどでした。幼虫、蛹、蝶。変容をプログラミングされた生物の必死さ。人間も気付いてか気付かずか、変容を余儀なくされるときがあるのだと、「カクレミノを編む」を創りました。 菊本千永

The scenery that I see

私が通っている高校は、駅から山の方へ徒歩30分のところにあります。学校へ行く間に見える景色は絶景です。その景色は学校に通う人しか見れません。他の学校に通う人は違う景色を見ていると思います。私の見ている景色を伝え、また、違う人が見ている景色も伝えてほしいです。今度見る景色はもっと絶景かもしれません。

稲益夢子

今回、創作実験劇場に初めて出演させていただくことになりました。二人きりで踊るのも初めてなので、いつもの発表会とは全く違う緊張感を感じています。先生や先輩方に夜遅くまで練習を見ていただきながら、一生懸命練習しています。ひとつひとつポーズをていねいに表現できるように頑張りたいとおもいます。

穂井田凜

流跡

生まれくるものは時の流れに跡を残す

いつのころだったか おそらく小学生だったか…

記憶は定かではありませんが あたりまえのように自分がこの世に存在していることが不思議に思うことがあった。何かの役に立ったりするわけでもなくただただ生きていくということが。

それが良いとか悪いとかを思うのではなく ただ不思議だったように思う。(自分が透明になったらどんなだろう…?とか想像したりして?)

そう 良いとか悪いとかではなく。

命あるもの全て この流れゆく時間の上に確かに存在し 跡を残していく。今はそう思うのです。

さて どんな跡が残りますでしょうか?(ネタバレ?)

向井華奈子

緬女とともに

このところキナ臭さが漂ってきました。人々が不安と恐怖心に希望を失い、生きる喜びを見失うのではないかと懸念しています。

アメノウズメの踊りによって世界が明るさを取り戻したように、平和への祈りを踊り続けたいです。

金沢景子

倚りかからず

茨木のリ子さんの「倚りかからず」を読んだとき、とても共感できるのだけど、詩から受ける印象があまりにも突っ張った感じで、私には、ここまで言い切ることはできないと思いました。あれから10年もたったでしょうか。毎日、あちらにもこちらにも寄りかかりながら暮らしていますが、それでも、この2本の足で何とか立っていたい、私でいたい、そう切に願っています。心の中にある椅子を確かに感じながら寄りかからずに。

寺井美津子

NOW OR NEVER

now or never

一言で言うと「今でしょ」です。「今」が積み重なって、今日になって、一年になって、十年になってそれが自分の一生になるのに、「今」この瞬間さえも後悔なく生きるの難しい。けれど、人生は「今」というピースで溢れています。思い返すと、たくさんの「今」が積み重なって現在の「今」があります。どんなに辛い「今」があっても、それも「今」に繋がっている。その「今」を乗り越えられたのは、支えてくれる人に出会った「今」があるから。必ず、自分の側に「今」居てくれる人がいる。すべての「今」があって、動き出せる「今」があるのだと思います。何気なくすぎていく「今」この一瞬をどれだけ大切にできているのでしょうか。あなたの「今」のピースを繋げて出来たそのパズルには何が映りますか?

平岡愛理 梁河茜

静かなる近づき

新聞やニュースで虐待、いじめ、性的被害にあった子供たちのことをよく見聞きします。被害者は人間を信じられなくなり、自ら人の輪から外れて行ってしまおうのでは、と思ってしまう。元の生活に戻れないまでも、心の平穏を取り戻すには周りの人々も被害者もお互い歩み寄り、距離を縮めるということが必要ではないか、という思いを踊りにしました。

続ける

人は全体に何かを失いつつあるか、失ってしまったのではないかと考えています。人々の心の中から居なくなってしまった“カミガミ”、人が心の中から追い出してしまった“カミガミ”を集めて“カミガミ”に思いをかけてもらいたいと願っています。これを繰り返して「続ける」と少しずつ心の栄養がついてくるのではないかと思っています。藤田佳代

ありがとうございました！

菊本千永モダンダンスステージⅣ 11月29日(土) 東灘区民センターうはらホール

PORTRAIT なにごともなきこの眺め 人形—アノコノシアワセノツテル 死者たちからのバトン 流れの中で メッセージ—福島土の神よ立ち上がれ
出演 寺井美津子 金沢景子 かじのり子 向井華奈子 石井麻子 板垣祐三子 灰谷留理子 梁河茜 平岡愛理 田中文菜 稲益夢子 木村はな ハーバート真直
原田光琉 渡辺菜子 菊原麻理奈 門家由采 新田小夏 大井遙 雲井瑞帆 坂本のより 中野茉歩 山鹿和奏 岡村春花 福本莉菜 石澤佑唯 菊本千永

リサイトを無事終えることができました。佳代先生、出演者のみなさま、スタッフのみなさま本当にありがとうございました。8月31日より振付を始めました。3ヶ月弱の期間でしたが、充実した幸せな日々でした。批評をシュプリッターエコー神戸 (Splitterecho Kobe) のweb版に載せていただきました。評というより文学作品を読んでいるようです。ぜひご一読下さい。

菊本千永のリサイトを見た。

あえて困難な課題に立ち向かっている舞踊家である。

困難な課題とは、「切断」と「持続」という二つの局面をひとつに統合することだ。切れるもの、あるいは切ることができるものと、切れてもなお続いているもの、続いているはずのもの。

たがいに対立して見えるこの二つの要素を、一つのダンスのなかに融け込ませ、一体化しようというのである。

四回目となる今回の舞台にかけられたのは、ここ数年の間に振り付けられた五作品。「PORTRAIT」「なにごともなきこの眺め」「人形—アノコノシアワセノツテル」「死者たちからのバトン」そして最新作の「流れの中で」。

ポートレート(肖像写真あるいは肖像画)、それは人生のある断面(切断面)で切り取られたその人物のそのときかぎりの風景である。

なにごともなく過ぎていく平和な日々、それはしかしいつ襲ってくるかもしれない切断(自然災害、事故、病死、戦争など)の予感をはらんで、不安からのがれられない日々である(現にわたしたちはなんとしばしば破局に出遭っていることか)。

人形、それはモノと人間との切断面に立ち上がってくる第三の存在にほかならない。

そして死者たち、それは生者たちから最も鋭く切断されて、最も遠くへ立ち去った者たちだ。

問題は、切断面がそこでいったん凝固すると、生命の循環がたちまち停滞してしまうことである。

生の流れが堰き止められ、荒涼とした世界が現われる。

この舞踊家は、だから、生き生きとした循環を守るために、切断に負けない持続を呼び起こそうとするのである。

強靱な持続の力がわたしたちのなかに脈々と受け継がれていることを、その力が世界の底を強固に支えていることを、ダンスで確認しようとするのである。

めざましい成功に達したのは「PORTRAIT」と最後の「流れの中で」であった。

「PORTRAIT」は終始三人のダンサーによって踊られた。

中が空洞の大きな枠を舞台の中央にしつらえたが、これは肖像写真あるいは肖像画がそこに現われたというところである。

枠の中でおむねユニゾンを基軸に踊るダンサーたち。

それは、ひとりの人物が幼年期、成年期、老年期へと向かっていく成長のプロセスのようでもあったし、また、親から子へ、子から孫へと移っていく世代の遷移のようでもあった。

動作のひとつひとつを鋭角的に切り立たせて、フラッシュの連続のように見せたのも、大きな効果を発揮した。

持続の矢が瞬間瞬間の切片(断面)をダイナミックに貫いていく、その推力と速度感を的確に視覚化した。

「流れの中で」はこの舞踊家の闘いのなかで、おそらくひとつの頂点に位置づけられる作品である。

まず特筆すべきは、舞台の大胆な構成だ。客席の前のほうから座席が大幅に取り払われた。

広びろと空いたその床面に黒装束のダンサーがひとり、静かに座した形で幕が開かれたのである。

黒装束の存在は、ただひっそりとそこに座していることで、却って不思議な存在感を漂わせる。

冥界の神ハデスのようでもあり、冥界へさらわれたペルセポネのようでもある。

一方、ステージの上の群舞はこれも静かな動きである。

円を描くようにめぐっていくのが、季節の移ろいのように美しい。

やがてその円はゆっくりと下の床面へ下り始める。

ステージの上と下とがそうして結ばれることになる。

死の国と生の国が大きな円環でつながれたわけである。

宇宙的な循環・持続が見えるかたちに現われた。

まさに死と再生の静かな祭りのようだった。

むろん観客のなかには、死の国と生の国の双極構造で世界をみるこのようなビジョンになじめないひともいるにちがいない(人間もモノと同様、しょせんは素粒子の集まりでしかないのだから！)。

だが舞踊家の情熱がわたしたちの心の欲求に沿っている、その方向性はだれもが認めるのではなからうか。

芸術は心の欲求の上に独自の宇宙を構成する。

その真摯な情熱こそ、この世界にまだ救いの道が残されている確かな証しになるのである。

山本志勝

今後の予定

4月2日 こうべ洋舞トライアルステージ 出演 門家由采 「春告鳥」

5月6日 こうべ全国洋舞コンクール 出演 木村はな「風音」 菊原麻理奈「あの日の蝶-青空が見えた」 藤井花名「雪結晶」

もうすぐ沈丁花が咲く、この季節になると思い出す小学校の時のこと。学校に行く前に突然思いついて、通りがかりの家のベルを鳴らして、庭に咲いている沈丁花をくださいと、お願いした。出てきた女性がほほえみながら沈丁花を切って新聞に包んでくれた、待つ間のそのわくわくする時間。ゆったりと時間が流れていたんだと、かぎりなく懐かしい。

責任編集 菊本千永